911.168-1892ウ
1200500755567
911.168
1.892

始

911.168
I·892

帝國圖書館藏

伊藤源著

歌集

三十年

八紘文庫

第一

帝國圖書館藏

南都怨山
源山人生

948
258

序

大正十年七月、私は關西から居を東京に移し、その年の十月に「しほさゐ」復活の意味で歌の雜誌「あけび」を創刊したのであるが、其後は戸山が原に近い私の寓居に於て、毎月歌會を開くことを怠らなかつた。伊藤源氏はこの歌會に於て知り合ひとなり、今に渝らざる私の歌友である。光陰眞に矢の如く、かき數ふればはや二十年前の昔となつた。その間「あけび」は譬へば燈火の明滅する如く、盛衰定りなく、發行常ならず、或時は依田秋圃氏等の「歌集日本」と合同しては復た分れ、發行所も東京より再び關西に移

り、相當多難な道を辿つたのであるが、伊藤氏は終始渝らず、或時は面倒なる編輯及び發行の事務を引受けて下さつたこともあり、默々として私共と苦樂を共にせられ、精進を續けられた一人である。この「歌集三十年」は實に斯くの如き伊藤源氏の第一歌集である。世に晩婚といふ語があるが、伊藤氏の歌集の如きは、夙に世に出づべくして後れたものゝ一つであつて、氏の經歴及び實力から言へば、第二第三の歌集が既に世に出てゐても別段怪むに足らないのである。併しながら斯く氏の歌集が後れたに就て、私はそれを他人事のやうに言つてはならない。氏はこの歌集を皇紀二千六百年の記念すべき年に出さ

うと企てられ、歌稿を整理し、その閲讀を私に託されたのであるが、疲れ易い私の遷延から、斯の如く又も後れた。之を思へば同氏に對し、私は眞に相濟まない。けれども此の歌集の眞價は、後れたが爲に毫も減ずることなく、却つて益々そのよさを發揮するものであることを私は深く信ずるものである。伊藤氏は豫て禪を學ばれ、寡默深沈、お世辭などを振りまく人でない。內に熱意があり、眞情を湛へられつゝ表面にあまりそれを出さうとする人でない。氏の歌も亦氏の人となりの如く、上面ばかりを飾ることなく、美辭麗句を聯ねたり、流行に阿るやうなところは微塵もなく、質實にして而も眞情の汲めども盡き

ぬものがある。氏の歌こそ人間伊藤氏の本當の聲である。平素歌と人と一致すべきことを信じ且つ志し來れる私共の歌風は、氏に於てまたその典型を見ると言つても過言であるまい。よく此の歌集を讀み味はるゝ人々は、私のこの言がまた過言でないことを恐らくは諸なはるゝことであらう。

昭和十七年一月

花田比露思

歌集　三十年　目次

明治四十年　針生峠……一
明治四十三年　ハレー彗星……二
明治四十四年　求道……三
明治四十五年　哲學……五
大正元年　春宵……五
幻想……六

大正二年
後期印象派の繪を見て……七
暑中休暇……七
大正三年
禪寺……九
果樹園……一〇
喜び……一〇
母……一一
痛棒……一二
半僧坊……一三
大正四年
接心……一四
大正五年

會津初冬……一六
偶感……一七
大正六年
會津早春……一八
勤め……一九
大正七年
新年……二〇
梅……二〇
富士登山……二一
あるとき……二一
背炙山……二二
大正八年
兒病む……二三

櫻花……一四
大正九年
長男出生……一五
蟻を殺す……一五
東山溫泉……一七
柳津圓藏寺……一八
入へ……一九
大正十年
死……二〇
沼津千本松原……二一
南千住……二三
大正十一年
葛飾の春……二三

伊香保……二四
妹の死……二五
鐘聲……二七
春雪……二八
大正十二年
春愁……二九
總持寺……四二
藤の花……四三
人江の小魚……四三
夜泣き……四五
關東大震災……四七
大正十三年
鯛の浦……六〇

子規庵にて……六八
桐の花……七一
ふるさとの山……七一
震災一周年……七三
秋思……七六
大正十四年
次男出生……七八
早春……七八
みちのく……七九
雪の日……八九
大正十五年
妻病む……九一
目黒植物園……九二

七夕……九三
初秋……九四
埴谷……九五
九十九里濱……九八
鹿野山……一〇一
石山寺……一〇三
潮出川畔……一〇六
石山雜詠……一〇七
大學官舍……一一〇
天龍寺……一一二
落柿舍……一一四
去來の墓……一一六
龍安寺の庭……一一八

京洛雜詠……一九
安江不空大人……二一
返らぬこと……二四
昭和二年
奥澤九品佛……二一
みづうみのほとり……二三
仲秋明月……二五
夢……二六
多深し……二七
昭和三年
武藏野早春……二九
九條武子夫人を悼む……三〇
風の吹く日……三一

野口英世博士を悼む……三三
雜詠……三四
秋……三五
祝賀……三六
御大禮奉頌歌……三七
轉任……三八
昭和四年
旅中雜詠……三九
閑上濱にて……四二
大鷹森……四五
仙人峠……四八
岩手縣小川村……四九
三本木原……五一

友……一六一
中尊寺……一六三
宮城野の月……一六四
急行列車……一六六
昭和五年
送別……一六八
地上……一六八
春の旅……一六九
草刈少佐……一七三
無常迅速……一七五
鮎川……一七六
金華山……一七八
青根温泉……一七九

蔵王山……一八一
山寺……一八三
臺の原……一八四
歳末感……一八六
昭和六年
長女の死……一八八
子を失へる頃……一九四
毛越寺……一九六
臺温泉……一九九
晩春……二〇一
大澤温泉……二〇三
石鳥谷……二〇四
龍雲院……二〇五

多賀城址にて……二〇六
饑饉……二〇七
釜石鑛山……二一〇
子……二一二
菖蒲田濱……二一三
鳴子峽……二一四
宮城野……二一五
時事感……二一六
スキー……二一七

昭和七年

函館にて……二一八
或る日……二一九
津輕海峽……二二〇

北海道遊草……二二二
悼花田つゆ子孃……二二七
雜詠……二二〇
碇ヶ關溫泉……二二四

昭和八年

津輕早春……二二四
偶感……二二六
北部保養院……二二七
鷹揚公園……二二九
轉居……二二八
銀座にて……二四〇
五所川原……二四一
小坂にて……二四二

種差海岸……二四五
陸中大更……二四八
幸畑……二五〇
酸湯……二五一
斗南行……二五三
石川理紀之助翁……二五七
轉任……二五九
昭和九年
迎春……二六三
十國峠……二六三
悼東郷元帥……二六六
雑詠……二六八
鶴見の家……二六九

雲谷峠……二七〇
幸畑再遊……二七二
思ひ出……二七三
ふるさとにて……二七四
勝常寺……二七六
興德寺……二七七
歸住……二七九
昭和十年
雛祭の日に……二八〇
平林寺……二八一
山寺の春……二八五
逗子養神亭にて……二八六
鬪魚……二八八

子規忌……二八九
母の死……二九一
昭和十一年
二月二十六日……二九四
老松……二九五
靈心悠々……二九六
歡送……二九八
熊……三〇〇
子……三〇二
白菊……三〇三
佛縁……三〇二
宗湛老師……三〇五
昭和十二年

正月山中吟……三〇七
伊豆早春……三一〇
關西雜詠……三一二
高野山……三一四
雜詠……三一六
目黒太鼓橋……三一八
母……三一九
支那事變起る……三二〇
妻病む……三二一
戰時詠……三二二
昭和十三年
湯河原にて……三二六
修禪寺……三二八

歌……三三九
池田成彬氏……三四〇
學士會館にて……三四一
ホール イン ワン……三四二
銃後……三四三
旅の歌……三四四
寺詣……三四六
昭和十四年
古書……三四七
獨語……三四八
武藏野……三四九
病床詠……三五三
子……三五四

業忙餘吟……三五六
箱根芦の湯……三五七
贈答歌……三五九
陶器……三六一
初冬……三六二
昭和十五年
迎春……三六三
雜詠……三六四
接心……三六五
惜春……三六七
多摩墓地……三六七
新體制……三七〇
偶感……三七三

紀元二千六百年奉祝日……三七四
觀艦式……三七五
伊勢神宮……三七七
橿原神宮……三七九
折々の歌……三八〇
卷末記
口繪　南部恐山　著者筆
長歌　一首
短歌　一千二百二十一首

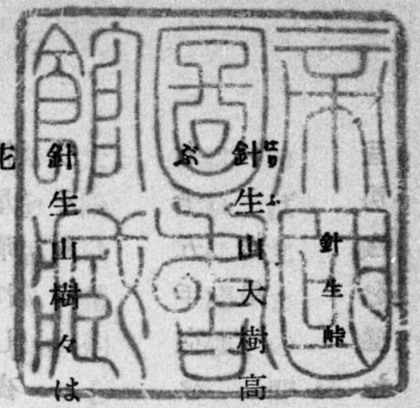
歌集　三十年

伊藤　源

平常是道（無門關）

南泉因趙州問如何是道。泉云平常心是道。州云還可趣向否。泉云擬向卽乖。州云不擬爭知是道。泉云道不屬知不屬不知。知是妄覺不知是無記。若眞達不疑之道猶如太虛廓然洞豁。豈可强是非也。州於言下頓悟。無門曰南泉被趙州發問。直得瓦解氷消分疏不下。趙州縱饒悟去更參三十年始得。

明治四十年



針生山大樹高鳴り風早み峯より峯へ雨雲の飛ぶ

針生山樹々は芽ぶかず麓なる谷間に白し山櫻花

翠嵐の凝りて流るゝ山水のこゝに淀めりすがし青淵

明治四十三年

ハレー彗星

箒星晴れし夜空に荘厳なり地上のものは聲をひそめぬ

七十五年空を旅してあやまたず今歸り來しハレー彗星

明治宮殿

巨房宮を壓して妖星輝けば秦の始皇もひれ伏しにけむ

明治四十四年

求道

ぬばたまの闇夜となれば魂のすゝりなく聲あはれに聞ゆ

太陽は赫灼と照りちまた行くわれは不滅の生命を思ふ

淨土今混沌として若人はさ迷ひ行きぬ闇の底ひに

青春のたぎつ血潮を僧房の黒衣につゝみ人かなしけれ

眞宗の信者の家に生ひたちて異端者とわれはなりゆくものか

攝取不捨の利益を受けむ素直なる心いつしか失ひにけり

無間地獄に墮ちゆくわれかたらちねの母に背きて何を求むる

明治四十五年
大正元年

哲學

哲學は悲しきかもやこの惱むわれを救はず神秘も解かず

春宵

シャンデリアを灯せこの宵を美しきカーネーションと乙女の爲めに

カーネーションの深紅の花にモナ・リザの美しき顔ほゝゑみかくる

幻想

人間か亡者か知らねぞろぞろと月夜の原を歩み來るもの

花園に舞ひ狂ふ蝶の死にゆくを月光のもと見つめたりけり

大正二年

後期印象派の繪を見て

生命の炎耀きこれの繪の山川草木燃ゆるがごとし

暑中休暇

スピノザの哲學原書買ひ求め暑中休暇にわが讀まむとす

スピノザの哲學原書讀みなづみ暑中休暇も終らむとする

丸善に來て何買はむためらはずわが買ひしもの碧巖錄講義（賞金）

學校より賞金を貰ひ第一にわれは買ひたり碧巖錄講義

明月清風を賞でつゝ庭に立つ久に照る月もなし吹く風もなし（無我）

大正三年

禪寺

禪寺の廣き堂内に獨り住み夜な夜なともす小さきランプ

只管打坐晝夜の區別われになし所得得悟さへありと云はなくに

ものの性の氣配に夜半に目覺めたり羽ばたきするどく大蝙蝠の飛ぶ

警(いましめ)めの打棒かとれはまどろめるわが顔の上の
大き羽ばたき

柳澤健嬢女詩集「果樹園」

果樹園にたわわに熟(う)れて果物の色とりどりに
美しきかな

喜び

勝本忠兵衛氏懸賞論文一等當選

さすたけの君が多額の賞金の一等得たりわが
論文に

浪花なる商人(あきびと)にして士魂ある君と聞ければた
だにうれしも

母

禪の修行に心魂傾けこの日頃他力本願の母を
うやまふ

たらちねの母の說き給ふ佛の道おぼろげながらわれに見え來ぬ

痛棒

叱ることは親切なりてふ禪寺にて馬鹿になれよと叱られにけり

居士のわれらに痛棒食はせし知客寮も隔り居ればなつかしきかな

悟らむと思ふ心も悟れりと思ふ心も迷ひなりけり

半僧坊

夜更けて天狗出づてふ半僧坊の月夜に登り天狗に會はず

半僧坊の月夜に登り坐禪すれば杉の木群にふくろ鳴くなり

大正四年

接心

僧も居士も接心始まりきほふごとく緊張の氣
分一山に滿つ

火の氣なき堂内に僧と居並びて坐禪をすれば
汗出にけり

警策の痛みは骨に徹れどもそのたまゆらゆ現
身もなし

禪の修行中信心篤かりし父母祖先の恩惠と思ふ
こと多かりければ

親に背き禪弟子となり今にして親の惠の深き
を覺ゆ

許されて老師の前をまかるとき熱き涙のあふ
れたりけり

禪の修行苦しと思はずたらちねの親に感謝の
わが涙かも

大正五年

會津初冬

山々に根雪積りて不知身柿の出盛る頃となりにけるかも

飯豐おろし日にけに吹けば冬籠る用意せはしく雪がこひすも

一冬を雪にこもらむ家々の軒につるせる干菜香にたつ

偶感

物心二元とわれは思はね唯物論世にはびこるは苦々しけれ

物いかに豐かなりとも神の國は心の外に見ることなけむ

經濟學學びてわれの思ふこと金もうけにはあらざりにけり

大正六年

會津早春

童(わらべ)らが堅雪こんこと呼びながら堅雪渡る春は
來にけり

川のべの土手の根雪のひとところ黑土出でて
蕗の薹萠ゆ

彼岸獅子の稽古の笛の音を聞けばこの國の春
も近づけるらし

勤め

ちゝのみの父の誡(いましめ)かしこみて日々の勤めにい
そしまむかも

永病みの父を思へば誠に背かずゆかむ嶮しき
道も

わが望み遠くはるけし今はただ心つゝしみ働
きゆかむ

大正七年

新年

磐梯の峯の白雪に初日さし會津國原年明けにけり

梅

谷川の音のさやけき山寺に梅咲きいでゝ句會ひらかる

富士登山

富士が嶺の頂にたてばひむがしの雲海のはてあかねさしたり

あるとき

愚とも人は云ふならむこれの世に正しく直くわれは生きたし

唯物の思想はびこり世の中は日々にけはしく
なりにけるかも

澄み渡る空を仰げば限りなき生命の力身内に
覺ゆ

背炙山

みちのくの背炙山の丹つゝじは今か咲くらむ
山燃ゆるがに

大正八年

兒病む

きさらぎの疾風の夜半に死に近きみどり子の
命をみまもる吾は

今ははや術なしと醫師はのらせども助かると
思ふわが兒のいのち

この兒はも死なしむべからずと妻とわれ一夜
もいねずひたにみとりす

醫學の力及ばぬならば今はただ親の愛にて救はむとすも

櫻花

天津日の光燦爛とふりそゝぎ盛りの櫻花燃え耀くも

眞下より仰げば盛りのさくら花光ふふみて空にもりあがる

大正九年

長男出生、日出夫と命名

元旦に産聲擧げし男の兒ゆゑ日の出のごとくあれと名づけつ

蟻を殺す

窓のべに書讀み居ればわが肌に小さき蟻の嚙みつきにけり

我力强かりにけむおゆびにて押へし蟻は氣絶
せるかも

嚙まれたるあとチクチクと痛み來て憎しみ心
高まれるかも

ペン先にてつゝき廻せば逃げんとしあわても
だゆるさまの醜し

苦しげにもがけば仇せしこの虫も助けてやら
む心起れり

はれあがる肌を見れば憎しみの心つのりて蟻
を殺せり

首をもがれ尙も歩める蟻の子の生きのいのち
のかなしきろかも

仇をせし蟻の子なれど生きものの命を斷ちし
さびしさ湧くも

さ夜中と夜の更けゆけば山水の落ちくる音の
さやかに聞ゆ

山水のひゞきは遠く又近く眠りを誘ひ眠りを
覺ます

柳津圓藏寺

山の上の高きみ堂の眞下なる只見の流碧く淀
める

僧兵のたむろせりけむそのまゝに寺の要害城
のごとしも

人へ

遠慮なく吾もの申す益良男は名利を捨てゝ義
に生くるべし

益良男は己を知れる人のため命死ぬちふ古も
今も

大正十年

死

生死を超越せりと思ひつゝ死を厭ふ心なほし
ひそめる

不生不滅有無にこだはるならなくにこの感情
は人間のものか

すばらしき感激あらばたじろがずたやすくわ
れも死に就き得べし

死を堵して爲さねばならぬ事あらば爲さざら
めやも男の子ぞわれも

沼津千本松原にて

月の夜の磯松風の吹きの間に千鳥の聲の折々
聞ゆ

いさり火のつらなる遠に月落ちて夜はまだ明
けず鷄の聲すも

みぞれふる寒き夕べを千住川岸に支那人夫らの錢よみて居り

僅かなる給金をため歸國して妻を買ふちふ支那人夫あはれ

白鬚橋渡りてゆけば水神の森ににじみて灯のともる見ゆ

大正十一年

葛飾の春

天渡る春日の眞澄み葛飾の畑打つ乙女のふりのよろしさ

葛飾の春の畑打つ乙女等のよろしき見つゝ丘越えにけり

汐入の入江の春日泊せる艀のうへに衣ほしたり

伊香保

かみつけの伊香保の山にわれは來て明月の夜
にあひにけるかも

伊香保山の明月の夜となりにけり心ときめき
いねがてぬかも

照り渡る月の光の明かければいとども聲をひ
そめたるらし

妹の死

歸朝中の妹花子産褥熱のため死去す

アメリカにまた渡る日を待ちにつゝ故里の土
となりし妹はや

みちのくの會津山脈雪降りてかゞやく下に妹
は死にけり

マヽと呼ぶ愛兒の聲に眼あけたれ今は見えぬ
か手を擧げにけり

（遺兒長男一郎三歳）

外國の言葉交りに幼子は何か言ひ居り母のむくろに

美しき人と云はれし妹は花のごとくも散りゆきにけり

霜曇る城跡の夜道妹燒くと提灯あまた流れゆくかも

火葬場の風窓に顔をひた寄せてこの世の別れに妹呼びにけり

鐘聲

鎌倉建長寺にこもりけるとき除夜に國寶の鐘をつきて

殷々と夜空にひゞく鐘の音ものすごくして二つとつきえず

いづかしく夜空にひゞくかねの音にいつか撞木の綱放しをり

つごもりの夜空にとよむ鐘の音命を寒くききにけるかも

春雪

鎌倉の禪寺に降る春の雪坐禪の人も出でゝ眺めつ

夜ふけて坐禪し居れば外の面にはかそけく雪の積もる音すも

久にして街を歩めば人間のものほる心湧きにけるかも

大正十二年

春愁

汐入村畑路ゆけば春の日のまともにてりて汗にじましむ

あわたゞしく打つ鉦の音やとむらひの合圖の鉦と人の告げつる

戀ひなやみ水にかづぎし乙女子のはふりのかねと聞けばかなしも

乙女子や戀のなやみに春寒き隅田の淵に身を
沈めけむ

隅田川土手の若草萠え出づる春日も暗く思ほ
ゆるかも

かぎろひの燃ゆる野の路いそぎつゝ見じと思
ひしものに會ひにけり

十方に春の光はみち足らへ棺を送る人しづし
づし

春の陽に白木の柩かゞやけば命さびしも眼を
そむけたり

うなかぶし思ひ沈めるうつしみに散りかゝる
花のひそかなるかも

あわたゞしき人葬りの鉦の音に櫻の花の散り
いそぐらし

隅田川潮濁りつゝ逝く水の流はつきず夕ぐれ
せまる

總持寺

戸を閉せるみ堂の内に經を讀む僧の聲々沈みこもれり

獨參の合圖の鐘か次々に歩廊を過ぐる僧のしづけさ

何がなし禪寺に詣でおのづから心すがしくなりにけるかも

總持寺の山墓原の松林夕風こもりおとのかそけさ

藤の花

藤浪の花の八千房ゆらゆらにゆらぐと見れど夕風もなし（粕壁にて）

入江の小魚

みなつきの日光とほれる水底に遊ぶうろくづ見のあかぬかも

群をなし浮き沈みするうろくづの一つ一つの
色の異り

一つ一つ生命を持てるうろくづの息するなべ
に水皺寄る見ゆ

足踏めば底ひに沈むうろくづのやがては浮び
息つくごとし

さかさまに魚の沈めば水底にきらめくものの
光を放つ

魚の群唱歌うたふか列をなし口を揃へて泡ふ
きにけり

樂しげに遊ぶ魚くづ情なく網な打ちそね漁す
る人

夜泣き

六月十九日、昨秋出産後死去せる妹の夫遺兒を伴ひ來訪し近くまた渡米する由を語る、其夜我家に宿泊せるに長男一郎は母を思ひ出せる模樣にて夜もすがら泣きつゞけたり

ひたすらに泣く子を抱きその父は深夜の庭に
下りたちにけり

家ぬちに入らむとすれば泣き出す幼子を賺す
聲の聞ゆる

母のなき幼子を守る父親の心偲ばひわが目覺
め居り

短夜ははや明け近し外の面にはわだちの響聞
えそめけり

母を戀ひ泣く幼子の聲聞かば天なる妹よよみ
がへり來ね

關東大震災

九月一日午前十一時五十八分關東地方に大地震起り續て帝都は火災の爲め殆ど焦土と化す、當時吾は隅田川のほとりなる會社の現場事務所に出役中なりき

搖りに搖る外面に出でしたまゆらによろめく
われをしき呼ぶ聲す

事務所前の稲荷の芝生にかゞまりて崩るゝ家
をたゞ仰ぎゐき

生けりとしわかぬ命を生きのびて起ちあがる
とき笑ひたりしか

皆が呼べば石炭の山に登りたり眼下に流る隅
田の大川

石炭の山の上にして見はるかす都の空の土煙
かも

わけもなく笑ひ合へどもおのがじゝ命生きた
る笑にかあらむ

おのがじゝ笑ひ合ふ間に搖り返す大地の響腹
に徹ゆる

搖り返し川に崩るゝ石垣の落ちゆく見たりう
つゝ心に

常ならぬ空の色かな仰ぎ見る裸あたまに照る
日の暑さ

舟の上に逃れ來る人數まさり舟とふ舟は沈む
がに見ゆ

市内八十八ヶ所より起れる火災廣まり來れり吾は京橋より銀座を過ぎ芝三田臺の我家に向ふ

妻や子の命如何にとひた走るわが家の方に火の手はあがる

行きかひし人の話におのが家の危しと聞き心いやせく

高臺の我家は崖崩れの爲め半壞となれり

なかばつぶれ住むによしなき家ぬちゆ物運び居る吾妹子を見し

高輪の宮居やく火は風下の我家になびきあつくて耐らず

傾きしこの家の内につゝがなく吾妹も吾子もありしといふかも

一家附近の妻の實家に避難す

吾子らみなおほ父母の家にあれば一目を見ん
といそぎ吾行く

伊皿子の廣き庭中にわが子らが吾を見てあぐ
る聲の愛しさ

妻の實家は江戸名所の月の岬にして東京市街及品川灣を一望に俯瞰す

横濱の空べに棚引く黑雲の日暮れて赤くかゞ
やき渡る

高臺のこゝの庭より見はるかす都はまたく火
となりにけり

都やく焔は天にうづまきて照る月さへや赤濁
りせり

九月二日夜暴徒襲ふと聞き高輪御所に逃る

庭隈に隱れしのぶとはからへど子の泣く聲に
家を去にけり

ますらをとわれは思へどうから率て宮所の庭に逃れ來にけり

すめらぎのみ民らきほひ仇人をうたんと竹の槍つくり居り

暴徒襲來は流言らしく伊皿子に歸る

月の岬の庭を高みか都やく焔は未だこゝに及ばず

青竹の大竹そぎて槍つくり夜すがら家をわが守り居り

幼時習ひ覺えし劍術の覺束なきを尙たよりつつ

九月三日朝

庭隈の木株の上にまどろめばはや曉の風のすがしさ

天地の滅びん朝を咲き出でゝいよよしづけき
朝顔の花

燒跡所見

うちひさす都滅びてたゞれたる人の屍重り合
へり

幼子を抱きてこやるたらちねの母のなきがら
運ぶものなし

男女の見分けもつかぬ黒焦の亡きがら臥る三
越の前

燒原となりし都の夕空にあらはにうかみ高き
富士かも

ともしびも見えぬ都の燒野原人燒く焔燃えそ
めにけり

宵ながらゆきかふ人の影もなく葬火赤くなび
かひにけり

暮れ沈むこの燒原に今日もなほ人やく煙たち
のぼるかも　（被服廠跡）

幾萬の命安しときそひ來て火焔の渦に燒け失
せにけむ

うちひさす都やく火のたゞなかに生命まさき
く睦み合ひにけり　（一家親族皆悉なし）

生けりとしたゞに思はずみちのくゆ夜を日に
つぎて來にける兄か　（義兄來る）

みちのくゆ兄が背負ひてもて來つる尊き米を
おし戴けり

九月某日雨烈しく降る夕暮築地本願寺のほとりにて

夕暮のしきふる雨にぬれぬれて罹災者ならむ
重荷を負ひゆく

燒原の雨の夕道行きなづみ親の袖とる幼子あ
はれ

重荷背負ひかゞまり行けば袖にすがるわが子
の手さへ取りがてにせり

たらちめは地震に命を落せしか父にすがりて
濡れゆく幼子

親子の電車に乗らむとしければ吾は幼子を抱きて乗せぬ。

走り寄り幼子抱けばずぶぬれに濡れしその子
の衣の冷たさ

大地震に命はてけむ汝が母を寢る夜は落ちず
夢に見つらむ

ふと「難難汝を主にす」などいふ言葉の思ひ出されて

しとしとに濡れにしこの子世に出でゝ名を成
さん日をわれは祈りつ

鎌倉にて

秋暑くなゐ未だやまずみ社の並木の櫻返り咲きせり（八幡宮通り）

なべてみな倒れしなかに仰ぎ見る興國禪寺の文字の大きさ（建長寺山門）

いたましく鐘樓崩れ國寶のうづの大鐘埋もれにけり

梁の下に挾まれこやる大鐘をいとほしみ吾のかゞまり撫でつ

ひた土にそのまゝ落ちし居士林の屋根に小さき蜂の集の見ゆ

日露戰爭にて足を失へる勇士の多年こゝに修行せるあり

居士林にわれと籠りしつはものの足の不自由を思ひつゝ居り

遠き世の大名小名住山の位牌散らばれり壁土の下に（拜殿）

大地震に命生きたる師と吾と寺のおくがに芋
食しにけり

久に逢ひし曇華老師のもてなしの芋のうまさ
に心和めり

鎌倉大佛は九月一日二尺程前に進み出で双頰にはかすかに傷生ぜしが恰もゑくぼの如く見ゆるを以て人々ほゝゑみのしるしなりといふ

なゐのむたおのれ動きしみほとけのほゝゑみ
てますおのれ動きて

坐禪堂僧堂も倒れ木洩れ日の光ほのかに開山
堂見ゆ

開山のこもり給へる昔よりほの暗きまゝに殘
る尊さ

曇華老師を見舞ふ

隱寮の石のきざはし登りつゝ無事とは聞けど
心さわぐも

由井ケ濱にて

餘震なほふりてやまねどこの濱に寄せくる波
の何事もなし

大正十三年

鯛の浦

音たてゝ舟ばたうてばほがらかに春の滿潮に
ひびきけるかも

舟ばたをたゝくひゞきの徹れかもわだの底ひ
ゆ浮く鯛の群

紺青の波間に亂れ紅の光りかゞよひ躍る鯛か
も

天津日の光にはえて鯛の群躍ると見ればはやもあらずも

青潮にかゞよひ匂ふ紅の目にし殘れど鯛は居らぬかも

子規庵にて

香取秀眞、寒川陽光(鼠骨)蕨樞堂等の諸氏集りて子規庵歌會開催せらる其折に

子規母堂尙健かにましませば二十年も唯昨日のごとし

歌會の人未だ來らず椎若葉そよぐを見つゝ心ひそけし

子規居士の居ませる時のまゝといふ庭の木草に思は深し

紅のつゝじの花に散りこぼれ小米櫻の盛り過ぎんとす

木戸のべの山吹の花この春も見る人はなく咲きて散りけり

いちはつの花咲きいでゝわが目には今年ばかりの春く
れんとす　子規

咲きいでしいちはつの花わが見つゝ目頭熱くなりにけるかも

病みこやる大人のなぐさといちはつを贈りし左千夫も逝きて久しき

うつそみにありける時のみ弟子たち今はみながら翁さびつも

桐の花

雨をふくむ夕べの空に浮き出でし山墓原の桐の花かも

かぎろひの夕かげ迫り桐の花紫の色いよいよ深し

ふるさとの山

うちひさす都にあれてわぎも子は山をともし
み繪に寫したり

わぎも子の繪にかく山をともしみとわれも見
にけりふるさとの山

磐梯に流れ寄る雲は夕まけて猫魔ヶ嶽にたゝ
なはるかも

猫の背の猫魔ヶ嶽にたゝなはる夕(ゆふべ)の雲も秋め
きにけり

震災一周年

ひととせは正にめぐりて十一時五十八分に鐘
鳴り渡る

むらぎもの心靜めてきくものかよもの汽笛の
鳴りのひゞきを

もろもろの鳴りのひゞきのなかにしてわれは
み社にかしは手をうつ

大空にみなぎる雲の陽をつゝみ風さへ出でゝ
こぞし偲ばゆ

仰ぎ見る雲のたゞずまひこぞに似て空ゆく風
にうめきの聲す

鳴りものの音のやみたるたまゆらはこの天地
のひそかなるかも

天地の寂しきにゐて耐へ難し卽ち經をよみあ
げにけり

みんなみゆ空晴れ來り靑ぐものすがしきみれ
ば心なごむも

その夜に

二日月空に見えしが昏れはてゝいなづま雲に
ひそみたるらし

風落ちて月なき空にいなづまの折々光り街は
ひそかなり

こぞのなゐに命落せし知人をこの夜のくだち
におよびかぞへつ

秋思

秋さらば死なむと云ひしふるさとの父のおも
かげまなかひを去らず

飯豐おろしの秋風寒むみいたつきの父を守る
らむ母も偲ばゆ

われのごときを孝行の子と父母の頼み給ふと
きけばかなしも

大正十四年

次男出生

百年に近き齢を健かにましますおほぢの名を
賜びにけり（正月二日次男出生、二郎と命名）

おほ父に劣らぬ命永らへてみ國の爲めにいさ
をしたてよ

早春

春されば舟に飼はるゝ雲雀子の空を戀ひつゝ
さへづるらしも

雨やみしひとときの間に生れけむ羽蟻の群か
渦巻き舞へり（專念寺）

寺庭の松が枝の下渦まける羽蟻の群よひとと
きの命

みちのく

鹿島臺附近出水のため一面赤濁りせる泥沼となれり

水漬きたる家のめぐりのポプラのみ青々しき
かも風にさやぎて

旅に出づる前夜依田秋圃氏宅に夕食に招かれ嘗つて同氏の執筆せられし「平泉の女」の其後の消息を傳へむことを約しければ

縁なきわれと思へや道のべにたちて聞きつる
人の身の上を

老杉の根方ゆ湧ける眞清水を口に含めば苔の
香ぞする（中尊寺）

老僧の衣吹き吹く秋風は套堂の扉に音たてに
けり（金色堂）

いにしへの光ともらふ套堂のほのぐらきなか
をいゆきめぐるも

ほのぐらきみ堂のなかに金色の光を放ち佛居
ませり

これやこの七寶莊嚴の卷柱螺鈿の光ほのかに
匂ふ

丘に立つわれに向ひて迫りくる北上川の出水(でみず)速(はや)しも（高館）

高館の丘に突き當り渦巻ける北上川の濁りしるしも

長塚節も行きたる五串の瀧（厳美渓）といふを尋ね夜となり暗き山路に困る

ひとつやに古提灯を買ひ求め節の行きけむ山路にともす

厳美渓に夜更けて來り天狗橋われは渡れど何も見えずも

常滑(とこなめ)のゆつ岩むらをたぎちゆく玉瀧の水白雲と湧く

吾も嘗て政治に興味持ちたるを大慈寺に詣でひとり思へり（原敬の墓）

あかときの風寒々し宿出でゝ向ふ山の端に光る星あり（巖手高原）

曠原はいまだ暗けれ岩手富士かぎろふいろの
たちそめにけり

岩手富士の頂にさす朝日かげふもとの山に次
第に廣まる

みちのくに深く入りたり蝦夷松のたち並ぶ下
の龍膽の花（三本木原）

みちのくの三本木原は山も見えず群なし遊ぶ
放駒かも

みちのくの蔦山のまに夕日さしたゞにひそけ
き桂月が基（蔦温泉）

みちのくの奥深き山に住みつきていのちはて
けむ君し思ほゆ

蔦沼畔にて大町桂月未亡人に遭ふ

みちのくの秋の山路にぬば玉の黒髪剪りし人
にあひにけり

隣室に宿れる雲山僧正は揮毫の漢詩を高らかに吟ず（花房雲山師）

蔦山を越えて奥入瀬の溪に出でんとする間は山彌々深くして原生林蔭尚暗く鳥の聲蟲の音も聞えず寂しさ言はん方なし。しかも斯る處にも生あるものはありけり。

あしびきの山を寂けみ生きものの何ものもなし吾と蛙子

苔の上にのど動かせる蛙子のいのちいとほしみ去りがてぬかも

奥入瀬の草木の綠鮮かに初夏新綠を見るがごとしも（奥入瀬）

たぎちては淀める水の瀧となり又渦巻きて早瀬と變はる

急湍となりて鳴る水そののちは平らに流れ音立てぬかも

奥入瀬の原生林の仆木の仆れしまゝに朽ちゆきにけり。

奥入瀬の溪盡るところ廣く開け明るしと見しが十和田湖なりき

みづうみは紺青にして黑ずめり舟よりのぞく深き水底を（十和田湖）

卵より魚となりゆく姫鱒の人と似かよふ標本あはれ（和井内孵化場）

山の氣の冷え冷えしさよ音たてゝランプの心の燃ゆる夜更けを（和井内ホテル）

曉の光ふゝめる湖（みづうみ）にひそむ姫鱒をわれは見にけり

越（こし）の海のさわだつ波を朱（あけ）に染め大なる太陽沈みかげつゝ（鼠ヶ關にて）

荒海のはたてに沈む太陽はくれなゐに燃え空を焦せり

雪の日

さ夜床に聽きつゝいねし雨の音曉かけて雪と
なりけむ

雪の日は庭松が枝にこもりゐて鳴かぬ雀のい
としかりけり

松が枝にくゞまりふくるゝ雀子は親子なるら
し大きと小さきと

大正十五年

妻病む

ゑみまけて子をすかし居る妻の眼に涙たまれ
るをわれは見にけり

ものいはず涙眼にため見送れる男の子のさが
やわれにかも似る

思ひあまり泣きゐる妻をかいいだき寢臺車に
乘せにけるかも

入院の母を見送る子らの姿いぢらしきかも庭木の蔭に

目黒植物園

日曜日子供らをつれて目黒に遊ぶ

止木に上りてがまを投げ落す悪戯を猿のくり返し居り

かな網の目より這ひ出るひきがへる猿は幾度もひきずりもどす

はやく逃げよと聲援をする子供らに無關心なるがまはいそがず

ましらの油斷のひまにのそのそとがまは金網をはひ出にけり

金網より這ひ出しがまに子供らは拍手を送り猿を笑へり

七夕

東京にたなばたの祭すたれつゝせち辛き世となりにけるかも

古の星祭りすと妻子らは色とりどりの紙に歌書けり

若竹に色紙を結ぶ子を見ればわが幼時おもほゆるかも

初秋

朝まだき伊皿子坂に出でくればしけあとの海濁りたる見ゆ

さ庭べのあら草なかの茅の穂のふくらみそめて秋づきにけり

埴谷

所用を兼ね上總睦岡村埴谷の蕨家の山林を見る

總の國埴谷の山をわが行けば百舌鳥高鳴けり杉の瑞秀に

裾かゝげ山めぐりする大人と行き洋服濡れぬ
杉の雫に

左千夫節秀眞も來り遊びけむ埴谷杉山神さび
にけり

蕨眞櫃堂の兄弟農林學校を經營す

杉を植る人を育てゝ兄弟共に根岸の歌詠まし
けり

蕨眞氏大正十一年逝去、遺歌集「林澗集」あり

埴谷の澗に御靈はとどまりて植る置ける木木
の育つ見まさむ

歌誌アラ、ギは蕨眞氏が埴谷の自宅にて創刊せり

アララギを創めし人のアララギに離れて久し
今は世になし

櫃堂氏の氣焰當るべからず

子規をあげ左千夫を示し今の世の歌を罵れり

埴谷山人

埴谷の山瑞杉の秀にたつ霧の夕べは白く棚引きにけり

九十九里濱

片貝に夜ふけて來れば海は見えず波のとどろき眞近く聞ゆ

九十九里の海のとどろき恐しきに天津夜空はおしかゝるかも

空と海とけじめもわかぬ大なる闇の空間に天の川絶ゆ

九十九里の夜空の下にもりあがり波のうねりの闇に寄りくる

九十九里の空に月なしおほ波のくづれむとして闇にあかるし

九十九里濱の曉もやこめて鷄(にはとり)の聲をちこちに聞ゆ(朝)

網引(あびき)する合圖の鉦の鳴りひゞき九十九里の濱明けそめにけり

網を揚ぐるたまゆらの聲勇ましや九十九里の海に日はのぼりつゝ

海原を離るゝ紅き太陽は圓く垂れたる天登りゆく

九十九里の海にさしのぼる朝の日のほがらかにして淺靜まれり

鹿野山

白雲の梢過ぎゆく老杉を仰ぎつゝ居れば倒れくるごとし

歸路はわが妻や子の家づとに手折りて行かな
秋草の花

千羽烏空を蔽へり神野寺の入相の鐘鳴りひゞきつゝ

九十九谷の向ふは海かはた空か海とも思はれ
雲とも見ゆる

東京は遠くはるけし目の下に周西の花火夜もすがら見ゆ

石山寺

山門はすでに閉ざせり潛戸を出で入る人の夕かげに見え

山寺の潛戸を入り境内のもの靜けきに行きはゞかれり

夕ぐれて灯火見えぬ山寺の築土のほとり蟲のかそけさ

山寺の大きみ堂を取圍む木々黑々ともりあがりたる

夕闇の石山寺をとひ來れば裏山にして水の音すも

旅を來てこの山寺の寂けさよ涙おのづから頰を傳ふも

暮れはてゝものの音なき山寺のきざはし登るあのとはばかり

山寺はすでにをぐらし目の下の瀨田の川波暮れなづみたり

みづうみは夕靄たちておぼおぼし大津の街の灯のしめり見ゆ

重々し鎖をつけし潛戸をひびき大きく外に出でにけり

瀨田川は夜霧たちこめはるかなる比叡の山に灯の見ゆ

瀬田川畔

學窓を離れて早十年石山にて同窓の友二人と同宿す

ささなみの近江の國にわれ來り枕並べて友と寢にける

十年振り枕並べて臥りつゝ眠りかねつもむかし偲ばひ

小夜更けて窓を開けば川霧の動きはしるし月の明りに

秋の夜もはや明け近しおのがじゝ語りつぎつつ思はつきず

人の世を行きなづむともそのかみの直ぐの心を失はめやも

石山雜詠

近江の湖瀬田のわたりに宿とれば三井石山の寺の鐘聞ゆ

入相に撞くや石山三井の鐘都を遠み人のこほしも

粟津原下りゐ沈める朝霧に寂しき光さしそめにけり

さゞなみの舊き都のあかときはしづかなるかもさ霧こめつゝ

螢谷流るゝ霧の絶間より有明の月の寂かなる見つ

おほみのみ瀬田のわたりの夕千鳥矢走の方に鳴きすぐるかも

瀬田川の川風寒し小夜ふけて石山寺になく狐(きつ)のこゑ

螢谷夜ふけて通り水底に澄みて動かぬ星を數へつ

天津星水底にして光澄めり螢のごとく影追ふわれは

草枕旅寢も永し近江路の寺々の鐘を聞き分けにけり

さゞなみの古き都に時雨ふり長等の紅葉色增しにけり

大學官舍

一昨年京都帝大學生監に赴任せられし花田先生は吉田山麓に居住せらる。この家は舊總長官舍なり。

門入りて玄關までは穗に出でしすゝきさやげり京にふさはし

先生の家に來りて嬉しもよ二階より見ゆ京の山々

學生の思想事件に夜更けまで歸り給はぬ先生を思ふ

天龍寺

松葉焚く香ほのかにたゞよひてしぐるゝ庭の夕づきしかも

大竹藪しづもりふかき夕景に峨山滴水の墓竝
びたり

在りし世に機鋒鋭き大禪師苔むす下にしづも
りおはす

大和尚今か喝せむとたゞすめば藪蚊が一つ顔
刺しにけり

つゝましく黄の花咲ける池の面にしぐれの雨
のふりすぎにけり（天龍寺古園）

近江路に咲きはびこれる曼珠沙華この園にま
で出しやばれるかも

苔さびし庭にはなやぐ曼珠沙華不調和にして
おもしろきかも

調和せぬものに調和ありさび深き禪寺の林泉
の曼珠沙華の花

選佛場（わが所有する峨山禪師の書簡はこの選佛場建立
に關するものなり）

一山の雲衲集ひ經よめばたちまち成りし天津
龍かも

落柿舍

靜かなる庵の奥に音のしてものをきざめる人
あるらしも

この庵に今住む翁のもの語り人の世さかりさ
びしくもあるか

わが友の植松壽樹の名刺もあり知るやとわれ
に尋ねしなかに

名に負へるこゝの庵の庭苔に柿の實一つ落ち
にけるかも

さ庭べの一本柿の張れる枝の葉越しに見ゆる
嵐山かも

古の人もわがごとこの緣に眺めましけむ向つ
嵐山

蜘蛛のいの糸の一筋に松の葉の枯れしがつきて庭に下れる

去來の墓

去來の墓は竹藪のなかにありと道行く人の云ひしかばわれは大竹藪の中に迷ひ入りぬ

蜘蛛のいを拂ひのけつゝ藪ぬちに去來の墓を探せりわれは

竹藪の千本太幹その奥のはかり知られずわれは迷へり

藪ぬちは射す日の光ともしきに足長蜘蛛の顔に落ちたり

幾年を人の入らざらむ藪ぬちの鳥獸を驚かしつる

蜘蛛の巣と草の實だらけになりて竹藪を出で嘆息を洩し乍ら藪の前に竝べる僧の墓をよみもてゆくに去來の墓を見出つ

柿主の去來の墓は諸人の目にも入り難き一つ石かも

髭豐かなる案内の翁聲高に庭の由來をわれに
聞かしむ

雲海に抽き立つ峯に見えずやとくどくどしく
も案内人云ふ

わだつみに峙つ巖か寄る波の音も聞えむ靜か
に居れば

觀る人の心のまゝに山となり海となる庭おも
しろきかも

砂の上に石置きし庭ありのまゝ見るもすがす
がしさびの極みに

京洛雜詠

養源院。この寺の血天井と稱するは鳥居元忠等の自刃せる床板を以て天井とせり。

腹切れる血潮黑々と今も見ゆわれは額垂れ念
佛申す

千手觀音千體座すそのなかに老體にして手のなきも見ゆ（三十三間堂）

千手觀音修理の料とそこばくの金を納めぬみ佛の爲め

京都の街目の下に見ゆ鴨川や市を貫き遠くまで白し（清水寺）

厭離庵。庵は藤原定家の山莊の舊址なり

秋草のゆらぐしづけさ古の歌人住めるさまの偲ばゆ

世をさけて歌詠まむとは思はねど庵の靜けさ心にしむも

安江不空大人

天下茶屋山松橋のほとりなる大人を訪ねむ夜となりぬとも

難波江に秋雨けぶる夕暮を地理知らぬ車夫の
車に乗りぬ

この土地に二三日前來しといふ車屋迷へりわ
れも旅人

幾年を會はまく思ひし大人と向ひ筆談をせり
夜の更くるまで

耳遠き不空の大人のみ言葉は文語體にて古さ
びぬ

今の世に文語體にて語る人目の當り見て尊く
覺ゆ

古を今を語りて熱しくる大人の言葉はとみに
力あり

繪かきなる不空先生は繪をかゝず古の書讀み
て暮らせり

不空大人と一夜をいねて次の日も語りつぎた
れ盡くることなし

返らぬこと

十月三十日父危篤の電報に接し叔父其他と急ぎ故郷に向ふ

うつし世の世すぎ心を振捨てゝ父をみとりに
われは歸らな

ちちのみの父の命をとりとめむすべもがもな
とひたに祈るも

省みて悔ぞさまねきいたつきの父の命を思は
ざりけり

あかつきのうすら明りに山々の雪のほのかに
見えそめにけり

みちのくのわがふるさとのもみぢばはうつろ
ひそめてしぐれ寒けし

門入りて叔父はさゝやけり家ぬちは人の死に
たるけはひなるかも

父の死を聞きわれは暫し茫然たりき

兄出でゝ父死にませりと云ひしときわれは何
事を思ひゐたりけむ

御顔の布取りあぐれば父上はたゞ安らかに眠
らすがごと

眼をとぢていのち空しき父上に言葉をかけん
すべもなし今は

いとし子のわれをも待たで何しかもつひの旅
路に立ち給ひけむ

手をとりてすべもすべなしうつしみのぬくも
りも今はうせ給ひしか

親と子のえにしもうすくこれの世にさかりて
ありしことの悲しさ

ほらからのみとりの話聞くなべにわれは思は
ず聲擧げて泣きぬ

父上がいまはの際もよましゝとふみ佛のふみ
を押戴けり

幾年を病みこやりつゝよましけむみ佛のふみ
は破れはてたり

破れはて文字もさだかに見えぬまでみ佛のふ
みをよみ給ひにし

生き乍ら佛の心になりませる父も苦しみ惱み
ましけむ

破れはて文字もよみ得ぬこのふみにまされる
かたみはなしとこそ思へ

みほとけとなり給ひにし父上に心しづめて香
を焚きまつる

棺に打つ釘のひゞきの痛々しすゝりなきの聲
そここゝに聞ゆ

都に歸りて

ちゝのみの父に死別れこの日頃幾夜もつぎて
夢に會ふわれは

これの世に一人の親となり給へるわが母上よ
健やかにいませ

さくら咲く春となりなばみちのくをいでゝ都
に來ませ母上

みちのくの雪ふる國の山國をなど出で來まさ
ぬ子や孫の待つに

昭和二年

奥澤九品佛

老松の緑のひまに咲き匂ふさくらの花は浮き
出でゝ見ゆ

九品佛のみ堂の屋根に春日照り緑の弱草萠え
出にけり

花見人多くは見えず武藏野の九品佛の寺のし
づけさ

寺庭に苅り干せる茅の乾割るゝ音かそかなれ
ども聽けばするどし

たちのぞく御堂の内のくらがりに丸品佛の竝
びゐますかも

御顏にうづ卷ありと幼子は聲をあぐれどわれ
には見えず

堂内の暗がりに眼なれしときみ佛の膀にうづ
卷の見ゆ

篠竹に椿の花をさしつらね遊ぶ子供らに交り
てわれも

これの世のうさも忘れて春の日やみ佛の前に
遊びくらしつ

みづうみのほとり

山の上に湛へて深きみづうみに秋の光は澄み
極まれり

みづうみの岸の草の穂ゆるがしゝかそけき風
も落ちはてにけり

うつしみのわれの命の幾久しくあり經たるら
しこのしづけさに

生けるものなしと思へる草原をあわたゞしき
もの過ぎゆきにけり

草むらをなびきゆるがし麤物の走れるさまは
すさまじきかも

麤物の走りゆくとき草の葉のさやぎなびかひ
風たちにけり

生きものの過ぎたるあとは秋の日のまさやか
に照りてもとのしづけさ

足曳の山の奥がのみづうみのこのしづけさや
とはにありこそ

わが家をめぐる諸木の搖れ光る月夜の風のすがすがしもよ

月清み寢がての人か夜もすがら不動詣りの鐘の音すも

夢

ありし日の父のおもかげをまざまざと相見つるかも夜明けの夢に

永やみのふしどをいでゝ坐り給ふ父のおもはなごやかにましき

學校の夏休み終へ故里を立ち出るわれの夢に見えくも

傍に父いますがに見廻はしてあかつきの夢のあとをさびしむ

冬深し

冬ふかみすがれはてたる寺庭にあらはに立たす石佛かも

路のべの霜枯草は夕風に音をぞたつるひとり聽き居り

朝なさな息つき深くわが越ゆる行人坂も慣れて親しき

昭和三年

武藏野早春

早春の井草の村の楷原(しもとはら)くれなゐほのかに陽にかゞよへり

きさらぎの風は寒けれ眞澄空雲雀の聲のみちあふれつゝ

繪をかくと武藏野に出で繪はかゝず雲雀の聲に聞き入るわれは

晴れ渡る空のいつしか曇りつゝ繪に寫す森の
色しづみ來ぬ

武藏野を蔽へる雲のあひまより日射は遠く秩
父嶺に落つ

九條武子夫人を悼む

幼子のわが子も泣けりこれの世の美しき人の
命短し

きさらぎの巷の風の寒けれやうつくしき人の
み魂かへらず

うつし世はなげきぞ多き無憂華の花咲く國に
ゆき給ひける

風の吹く日

休み日をひねもす吹ける春嵐木々に騷ぎて心
落ちつかぬ

世の中はけはしくなりぬ押賣の幾人もくる風の吹く日を

ひねもすを荒める風の夕止みて和める空に赤き星見ゆ

野口英世博士を悼む

黄熱病研究の爲めアフリカのアクラに出張中なりし野口博士は遂に同病に罹り五月二十一日アクラに於て逝去せらる。博士は余が郷里の先輩にして大正四年秋米國より歸朝せられし際余は親しくその謦咳に接し共に紀念撮影をなせり。今悲報至り博士の死を悼むと共に人類の一大損失なる事を歎かざるを得ず

今の世に名ある博士はさはにあれど博士のなかの博士ぞ君は

人類の爲めに仕遂げし數々の偉功思へば誰か及ばむ

敷島の日本の國に君ありと誇れるものを今し悲しも

小柄なる君にしあれど日本人の偉大を世界に示してありき

湖に近き三城潟をわれ知れりかの僻村に君は
生れし

磐梯の火を吐く山の麓にし偉なる人の生れに
けるかも

貧困の家に生れて苦學力行偉いなる業績を遂
げましにけり

磐梯のこゞし高山崩るとも君のいさをしくゆ
る日あらめや

過ぎし日に君と撮りにし寫眞のいまはかたみ
となりにけるかも

ありし日の俤かなしたかぶらぬ君の話を今も
聞くがに

野口博士の話をすれば幼兒ら膝を正してかし
こまり聞く

雜詠

宗不旱兄來訪、寄書して歌友に送る

ほろ醉の眼にしみてさ庭べの百日草の陽に燃
えたつも

酒飲みて赤くなりたる吾兄の顔つくづく見れ
ば古武士のごとし

ひぐらしの聲に暮れゆく祐天寺早扉を閉して
境内の寂けさ（祐天寺）

祐天上人の墓に詣でつ德高き人に額づくは心
すがしき

ひがみなば佛も鬼と見ゆるなり常持たまほし
直き心を（人に）

わがために佛の道を說き給ふ母の眼は涙ぐみ
たり（母）

秋

秋の日の入りて間もなき西空にほのかに蒼し
二日月かも

妻が好みに移し植ゑたる野菊の花白く寂しも
夕かげにして

祝賀

秩父宮殿下御成婚當日松平邸に參上して

わが姫君嫁ぎます日や空晴れて雀も千代をと
とほぐらしも

ととほぎの御酒にほろよひ都路を妹としゆけ
ば御代は目出度し

御大禮奉頌歌

ひむがしの日出づる國をしろしめす萬世一系
のわが大君かも

日本に新しき力漲らむ若き帝をほぎたてまつ
る

轉任

さ庭べの白菊の花衰へてわが去なむ日の近づきにけり（十二月仙臺に轉任）

このあした置く霜白し指してゆくみちのくの冬をわれは思ふも

あわたゞしく旅立つわれを見送れる幼き顔の目にちらつくも

昭和四年

旅中雜詠

川岸のこの高樓に吹きあてゝ月夜嵐の息づけるらし（飯坂溫泉）

よもすがら吹きすさみたる風靜まり山川の瀨の音冴えにけり

灣をかこむ雪の山々に朝日さし海の面明るくなりにけるかも（淺虫）

北海道近しと思ふ港街の風の寒むけさ粉雪降りつゝ（青森）

夕まけて寒風山を隠したる雲廣ごりて雪となりけり（船川途上）

八郎潟何處とわかぬ廣々し雪野の末に寒風山見ゆ

山の驛に下りたちし醫師を橇に乘せ村人大勢ひきゆくが見ゆ（小坂途上）

あしびきの山家は雪に埋もれて命死にゆく人あるらしも

雪深く家を埋むる山住みの人のたづきをわれは思ふも

最上川の川口に寄する日本海の荒浪の餘波逆巻き騒ぐ（酒田）

屋根よりも高く積みたる雪の上に路あるらしも橇走る見ゆ（舟形附近）

雪に埋れ僅に屋根の見ゆる村かしぎの煙雪の
なかより

青根温泉

みちのくの藏王の嶺ろに湧くみ湯の溪川とな
り落ちゆきにけり（晩春藏王の山腹に登る）

春雨庵にて　春雨庵は山形縣上ノ山温泉にあり。澤庵和尚の謫居せる處にして庵中に和尚筆の「夢」といふ扁額を掲ぐ

うつし世を夢と觀じてこの庵に聽き給ひけむ
春雨の音

關上濱にて　住み慣れぬ北國の寒さに妻子らの病臥續けり、特に長女は弱し

かよわなる子供らの爲め家借ると寂しき濱に
われら來にけり

みちのくの寂しき濱の砂原に子の行末を妻と
語るも

今は亡き父をぞ思ふこれの世は夢のごとくに
儚なかりける

しけあ　の揉まれし海のうねり波もの思ふ間
もとゞろき渡る

父母の寂しき心知らぬ子は海に來しとてたゞ
に喜ぶ

波の上飜り飛ぶつばくらめ汝も寂しきか生き
のいのちを

大鷹森

春霞淡くとめたり松島の八百八島眠るがに見
ゆ

渺茫たる太平洋の沖合の霞のなかに金華山聳
ゆ

大鷹森の島の窪地にかたまれる小さき家群に
國旗飜へる

島の中に水田ありき春早く己に蛙のところと
の聲

仙人峠

遙かなる太平洋より湧く雲は眼下の山脈に雨を降らせり

目の下の山脈に雨を降らせつゝ過ぎゆく雲のこゝに及ばず

岩手縣小川村

三井鑛山技師永淵氏と共に視察に出張す

鈴蘭の香り漂ふ溪のべに石炭の露頭をわれら探せり

溪間よりふり仰ぐ空の美しさ光に醉ひてよろめきぬわれは

山風に樺の若葉は飜り藤の花房搖れのしづけさ

紫の雲たむろすと見るまでに桐の林の花盛りかも

若草の山の連りなごやかに眼づたふ末は空に
まぎるる

草山の幾連りの放牧場夕かたまけて牛一つ居
ず

放牧場に牛の影見えずたんぽぽの茹(ゆだ)亂れ飛ぶ
夕風のなか

屋上の石白々と暮れなづむ山家は軒に菖蒲さ
したる

三本木原

草も木も眠りひそけき曠原に有明の月傾きに
けり

有明の月冴えながらしののめの霧たちそむる
陸奥の高原

しののめの三本木原を行きしかば馬柵(ませ)白々し
有明の月

群をなし廣野を駈くる若駒もうまいすらしき
有明月夜

友

松島灣内桂島に夏を過ごせる時竹馬の友柏木信一郎君來遊す

用なきも會ひたくなりて來しといふ友の言葉
は身にしみにけり

良き友をわれは持ちたり三十年の交り今もか
はることなし

松島の月夜さやけし遠く來し竹馬の友と語り
あかさむ

うつし世に生くる苦しみ樂しみを月に照らさ
れ共に語るも

中尊寺

山裾の奥州街道めぐりゆく馬蹄のひゞきいつ
までも冴ゆ

窓近く繁る諸木の葉を透きて秋の光のさびしらにさす（願成就院一首）

山峡の樹々にかこまれ草の家かたまりひそけし衣川村

中尊寺の裏山に立てばかすかなる瀬の音聞ゆ衣川かも

宮城野の月

宮城野の月夜に立てば秋風の音さへもなくただにひそけし

月を仰げば今まで聞えぬ風の音の耳許にしてするどく聞ゆ

天地に聞ゆるものは秋の風月に照らされ吾ひとりなり

宮城野の空ゆく月の速かさ廣野の末に早や傾けり

急行列車

大みそかの急行列車のなかにしてあわたゞし
きわが一生思へり

この日頃きざしそめたる焦燥の心抑へて吾は
ありけり

わが齢四十路に近づき世の事に惑ふ心のなし
と云はなくに

誠もて貫かむとす今更に名利を追はむ吾と思
へや

一生の行き着く先を思ひ居り大つごもりの急
行列車